

美術の窓 (136)

ホノルル美術館のミッチェナーコレクションとレインコレクション

大和文華館館長 浅野秀剛

2月中旬の1週間、ハワイのホノルル美術館に行き、コレクションの調査をさせていただいた。科研費『在外絵入り本を中心とする書誌・出版・解釈の総合的研究』(研究代表者 山下則子 課題番号 26300020)での調査に参加したのである。私がホノルル美術館の調査をさせていただくのは2回目、前回は2005年の夏、鳥居清長の版画を中心にしたものであった。ホノルル美術館にはジェームス・A・ミッチェナー(1907~97)の収集した約5,400点の浮世絵版画が所蔵されており、その一部を拝見させていただいたのである。その時点で、リチャード・レイン(1926~2002)のコレクションはホノルル美術館が収蔵することが決っていたのであるが、簡易なリストを作る作業のため、コレクションはまだ京都にあった。今はそれもホノルル美術館に収蔵されている。

ミッチェナーは、著名なアメリカの小説家なので、知っている人は多いと思う。最初の小説『南太平洋物語』は、『南太平洋』というミューズ・ジカルになり、『サヨナラ』や『ハワイ』も映画化されている。ミッチェナーが著作のかたわら熱心に浮世絵版画を収集し、それについての著作もあることは浮世絵関係者なら誰でも知っている。ホノルル美術館に寄贈・寄託されていたコレクションは、1976年、日本の三か所で公開された。当時私は、京都から東京に居を移して、東急百貨店での展覧会を見て、その素晴らしさに驚嘆し、図録を買って帰ったと記憶している。今、そのコレクションは

全てホノルル美術館に収まっている。

レイン氏は、井原西鶴など日本文学や美術を幅広く研究した人で、私も何度かお目にかかったことがある。レイン氏は主として美術品や古書の売買で生計を立てていたこともあり、莫大な量の資料を所蔵していた。よくは憶えていないが、私はレイン氏に所蔵する資料を見せてほしいとお願いしたことがあったと思う。しかし、氏は私のように、人の持ち物を盗み見て狡辛く研究する輩を嫌っていた(と私は思っていた)ので、希望は叶わなかった。しかし、1995年に大英博物館と千葉市美術館で開催した「喜多川歌麿」展には歌麿の春画の名品『ねがひの糸ぐち』の完全なセットを、2000年に千葉市美術館で開催した「菱川師宣」展には、西鶴の『好色一代男』を師宣が絵本化したものの後半部分である『好色世話絵づくし』(他に伝存していない孤本)と、師宣初期の肉筆画「楽屋図」を貸してくれた。これもよくは憶えていないが、「楽屋図」はレイン氏の推薦によって借りたように思う。師宣展が終わって、京都、山科のご自宅に戻りに行ったのが、2000年12月上旬。お目にかかったのはそれが最後である。その2年後にレイン氏は亡くなられた。そのコレクションの大半が今、ホノルル美術館にある。レイン氏は、ミッチェナー氏のコレクション形成を手助けしていたので、その二人のコレクションが仲良く収まったことになる。

ホノルル美術館のレインコレクションは、約15,000点というが、まだ完全には整理されていない。コレクションの中心は、江戸時代の書籍、絵

画で、春画も充実している。今回、レインコレクションの調査に当たることが出来たのは3日弱であったので、私は絵本だけを通覧した。驚いたのは、上方子ども絵本の量の多さである。この分野は美術史的に魅力的なものが少ない割には稀本が多く、研究者がほとんどいないというのが現状である。宝の山と思ったが、その多さに怯み、手を付けるのを諦めた。レイン氏は、オークション会場では一番前に座り、一番安い作品ばかりを買っていたという(ジュリア・ミーチ氏が、レイン氏の追悼文にボブ・ソワーズ氏の話として紹介)。逆説的な言いようになるが、そのことがレインコレクションを充実させた原動力であると思う。20数年前、私は東京の浮世絵商から、レインさんから預かっているという歌麿の錦絵を見せられたことがあった。100枚は優にあったが、どれも状態が悪く、いわゆる安い商品である。しかし、その中に、今までの歌麿の作品目録にないものが数点混じっていた。それらは、俗な言い方をすれば「新発見」の作品である。それは「一番前に座り、一番安い作品ばかりを買った」成果であると思う。子ども絵本の充実ぶりも、人が見向きもしないものを丹念に集めた成果である。確信している。だから、レインコレクションの絵本に、完全な美本は少ない。しかし、珍本・稀本は多いが、それらはまた、然るべき人が然るべき所に発表されると思うので、今回は、ミッチェナーコレクションを一、二紹介したい。

歌川広重は保永堂版の「東海道五拾三次」で著名な浮世絵師である。広重は、生涯に一万を超す錦絵を制作したと思われるが、絵入り高級便箋ともいべき絵半切は、「江戸近郊名所」のシリーズとされる13

図(私が確認できたのは12図)しか知られていない。そのシリーズはミッチェナーコレクションにも6図あるが、17.4×48.6cmの「飛鶴図」も絵半切と思われる。「広重画」と署名し、「立斎」の瓢箪印があるもので、空摺りで表わされた鶴が飛んでいるだけの図である。寸法と、強い色料を使わない余白の多い構成が絵半切の特徴に合致するのである。この図はシカゴ美術館にも所蔵されているが、日本では確認していない。

ミッチェナーコレクションにある別の無款の「飛鶴図」も、17.5×44.3cmの寸法から、絵半切と思われる。この図は飛鶴が下半分にしか描かれていないので、絵半切の特徴がより際立っている。これも広重である可能性があるが、今は未詳としておきたい。タンポボなどが描かれた「春草図」には、「溪斎画」とあるので溪斎英泉画と判明するが、それも絵半切と推定される。それらは皆伝存の報告がない珍品といつてよい。

紙数が尽きたのでこれで終わりにするが、最後に、レインコレクションではあるが、「雑」とされて未整理だった、婚礼の諸入用帳の袋について一言記しておきたい。この袋は菓子袋を流用したものと思われる。今は全く退色して読めないが、おそらく、表に「御菓子」などと記されていたと推定される。調査中、「心眼を使えば見える」と冗談を言ったが、赤外線写真などで文字が浮かび上がることを期待している。流用されたのが享和2年(1802)なので、菓子袋として使われたのはそれより前ということになり、現存する最も古い菓子袋であるかもしれない。



図1 広重「飛鶴図」ホノルル美術館(22349)



図2 無署名「飛鶴図」ホノルル美術館(22350)



図3 英泉「春草図」ホノルル美術館(22363)

季刊 美のたより No.194

平成28年 4月 8日

発行 大和文華館